

『困っている人に気づいたら』

朗読者 森山 良子

01

私がずっと住んでいる町の秋のお祭りの時の事。信号機がある交差点の手前で、道いっぱいにあふれる人。その中に、白い杖を持って、行き先を見失ってしまった若い女性が目に飛びこんできました。

10

思わず駆け寄って「今日はお祭りで人がいっぱいわからなくなっちゃうでしょう？ どちらの方向に行くの？」と声を掛けたら「あんまり人が多くて、方向が分からなくなってしまうて・・・」と途方に暮れた様子。「じゃ、この交差点、一緒に渡りましょ」と軽く手を添えてゆっくり交差点を渡りました。

15

「ありがとうございます。・・・ここからは大丈夫です。有難うございました」

「それでは気を付けてね」と見送りました。

20

世の中には、さまざまな障がいや問題を抱えて生きている方がたくさんいらっしゃいます。そしてその人達は白い杖を持っていたり、車椅子で行動していたり、カートを押しながら歩いているいたり、キョロキョロあたりを見回していたり・・・色々なサインを出して「困っています」「ちょっと手を貸してください」「教えてください」と周りの人達に呼びかけているんですね。

まわりの人達はそんなサインに、敏感に気づく必要があると強く思います。

自分の仕事や用事や、あれやこれやで心が一杯になってしまつて、周りにいる人の事、構ってられない、という方もいらっしゃるかもしれません。

でも今の時代、高齢者・子供・体が不自由な方・外国人・世の中のスピードについていけず、困っている人達が沢山いることを忘れてしまつては、いけないと思つています。

迷つたり、戸惑つたり、困っている人を見かけたら「お手伝いしましょうか？」と自然に声をかける。そんな社会にしていきたいものですね。

思いやり社会とか共生社会というのは、自分の身の周りの人達に気を配りながら、「困っていませんか？何かお手伝いしましょうか？」と気軽に声をかけながら共に生きて行く社会。

そんな世の中を一日も早く実現しなければ・・・を実感した秋祭りの思い出です。